

戦争 反対

いのちを守る 現場から

日本プライマリ・ケア
連合学会

丸山 泉 理事長



まるやま・いずみ 医師で詩人の丸山豊氏の長男として1949年、福岡県久留米市に生まれる。75年、久留米大学医学部卒業。85年、丸山病院院長、89年、同理事長に就任。小郡三井医師会会長、日本医師会代議員を歴任した後、12年から現職。

医療・福祉の現場から「戦争反対」の声を発信するシリーズ。今回は、日本プライマリ・ケア連合学会の理事長として、地域医療や在宅医療について精力的に活動する丸山泉さんに聞きました。(丸山聡子記者)

■激戦地から帰った父
私の父は早稲田大の仏文科で学んだ詩人でした。その後、家業であった医師となり、軍医として北ヒルマ(現・ミャンマー)に赴き、

退却路が「白骨街道」と呼ばれたほどの激戦地、絶対な体験をして帰ってきました。三二歳の時に敗戦を迎えた父は、ずっと沈黙を守っていました。それが五四歳

の時に、初めて戦争体験を語り始めたのです。地元紙の「西日本新聞」での連載で、五〇回を数えました。連載の初回の言葉は痛烈です(別項)。父にとっ

て戦争は「抜歯のきかぬ虫歯」であり続けました。忘れるのできない記憶だったのです。同時に出発点でもありました。戦争から帰ってきた時、確かに民主主義が始まったと思

った。軍での序列もなく、車座になり、行末について語り合ったのです。しかし敗戦から二〇年経つとその風土は失われ、元軍人が集まれば階級順に座り、軍歌を歌う

「私にとって、戦争の記憶は、とりもなおさず、抜歯のきかぬ虫歯である。折りにふれて痛みだし、世間智におぼれそうな私を、きびしい出発点へひきもどす。自らへの問いが始まる。戦争とは何であったか。死をくぐりぬけるとはどうか。最後にそこで何を決意したか。戦友の末期の声はなんであったか。それは今日の私の世界観とどう結びついているか」(創言社『月白の道』より)

戦争では医学も無力 医療人も社会性を持って

ぞと繰り返してしました。戦争では医学の無力さを実感したのでしよう。父の思いがこの歳になって分かってきて、私自身の原動力ともなっています。医療人も、医療だけではなく社会性を持って生きなければならぬのです。

■命が大切にされない戦後、車座になって語り合った民主主義はどこへ行ったのか。いまだこの国には、民主主義が根付いていないと感じます。多くの人が危ない空気を感じているのではないのでしょうか。私自身は、極めて危うい時代になってきていると感じています。だからこそ、多くの

日本人は、極めて危うい時代になってきています。そのこととは病院経営にも表れています。未収金が増えま

冷たく、気配の足りない言葉には若干否定的なニュアンスがあり、地域の人たちから慕われる「立派な人」は、たいていお金を持っている人だった。ところが最近「お金を持っていること」が一番らしいことになり、「お金持ち」が大きな顔をして、物事を決めたり意見を言ったりする。『命より「お金」が大事』(角川)

医師会も社会に向けて声をあげるようになってきました。大事なことです。そうでなければ日本の医療は守れない。医療人は、国民を守る立場に立たなければならぬと思います。